

書評・紹介

小谷信千代著

『大乘莊嚴經論の研究』

早島理

近年、インド大乘仏教研究の進展には著しいものがある。初

期の瑜伽行唯識学派の研究についてもすぐれた研究業績が提出されている。最近の研究動向の特色の一つに、研究論叢のみならず、その根拠となる厳密なテキストクリティクと翻訳研究の増加があげられよう。我が国のものに限定しても片野道雄『唯識思想の研究』(『撰大乘論』「所知相分」無性釈の解説研究)、長尾雅人、梶山雄一編大乘仏典中『世親論集』、長尾雅人『撰大乘論』上(「序・所知依分・所知相分」)や研究継続中ではあるが高橋・松濤・勝部「瑜伽論・声聞地」などがすぐに浮かぶであろう。最近、我われはこの研究動向に連なるものになされた成果を一つ加えることができた。小谷信千代『大乘莊嚴經論の研究』(同論第XIV章安慧釈の解説研究)である。同論書の研究は周知の如く二〇世紀初頭、フランスの碩学 S. Lévi 博士による梵文テキスト(一九〇七)ならびに翻訳研究(一九一

一)をもって嚆矢とされる。我が国における解説研究は、宇井伯寿博士によるパイオニア的業績『大乘莊嚴經論研究』(一九六一)以来まとまったもの見あたらないのが現状である。近年、西蔵文典研究会「安慧造『大乘莊嚴經論』釈疏」(第Ⅹ章菩提品の解説研究、一九七九・一九八一)や袴谷憲昭「Mahā-yānasūtrālanīkharaiḥka 最終章和訳」(第XIX・XX章無性釈の解説研究)などいくつかの章について解説研究がなされつつあるが、初期瑜伽行派に占める同論書の重要性を鑑みるに、より多くの章の(安慧釈・無性釈に基づく)解説研究が要請されているのである。本書はかような情況の中で望まれて出版された本格的な研究書である。

二

「本書は唯識説を『大乘莊嚴經論』(以下『莊嚴經論』)第十四章教誡教授品(この章題名については改めて論じるであろう——評者)に説かれる瑜伽行修習の階梯の上に位置づけることによって、唯識説の担っている役割を明らかにすることを中心テーマとしている」と序章に記されているように、瑜伽行修習の階梯に関する諸問題を考察する第一部と、その考察を主に支えている『莊嚴經論』第XIV章の和訳研究及び校訂梵文テキスト(偈頌・世親釈)、同西蔵文テキスト(安慧釈)よりなる第二部との二部構成をなしている。第一部はさらに、全五章からなる『莊嚴經論』の註釈者の問題(第一章)、『菩薩地』を中心に『瑜伽論』と『莊嚴經論』との関連について(第二・三章)および

西蔵における『莊嚴經論』の研究(第四章)の前四章を導入として、筆者が最も力を注いだと思われる(第一部一三五頁中五〇頁を占める)「瑜伽行における法の修習」(第五章)が続く。以下微力ながら、順を追って所感ともども本書の紹介を試みよう。

三

第一部第一～四章は先述の如く、第五章「瑜伽行における法の修習」へのいわば序説ともいべきものである。ここで論じられている『莊嚴經論』注釈(Bhasya)の著者や『莊嚴經論』の章分けに関して、あるいは同論書と『瑜伽論』との先行性の問題については、小川一乗教授が「この提言はこれらの問題に最終的な決着をつけるものではないにしても、それを解決していく上で新たに加えられるべき有力な研究成果である」(「序にかえて」)と述べておられるように、決定的な文獻資料が見出されていない現時点では、最終的な結論は望み得べくもない。かような情況のもとで我われがなし得ることは地道に文獻を読みあさり、一つでも多くの資料(たといそれが決定的なものでもなくとも)を積み重ね、それに依拠してより確実な推定や仮説を提出し続ける以外にあり得ないのではなからうか。筆者はこゝ第一～三章ではこれまでの学説とその根拠を丹念に検討し、各々の特色と弱点とを明らかにする。その上にいくつかの新たな資料に基づいて筆者なりの結論を提出する。新たな資料のうち注目すべきは後代のチベット学僧による『莊嚴經論』注釈書で

あるがこれについては後に紹介したい。

さて、筆者の結論は幾分控え目であるが、評者には妥当なものに思われる。『莊嚴經論』Bhasyaの著者についてYimuk-tsonaの *Abhisamayalamkaraṅgīti* に基づくAsaṅga 説を採用せず「安慧、利他賢、智吉祥などが所属していた系統においてはMSABhの著者は世親であると伝承されていた」(一二頁)ことに基づき、文獻資料をあげて世親説を支持する。また『菩薩地』と『莊嚴經論』の対応関係についても、後者の構成を注釈者安慧や無性が前者に依って説明している点を、具体的な文例をあげて示し、また両者の類似性を示す他の諸理由をあげつつも前後関係については慎重に判断を避けている。同様に『瑜伽論』と『莊嚴經論』との先行性に関しても、いくつかの資料を示しつつ「世親と安慧の伝承においては『瑜伽論』が『莊嚴經論』に先行すると考えられていた」(四六頁)という結論に甘んじている。『瑜伽論』全五分の著者と成立年代について、あるいはそのうちの『菩薩地』現行梵本の古層と新層との成立過程に関していくつかの問題点が投げかけられ、諸学説が錯綜している現時点で著者の慎重な態度はやむをえないものであろう。読者の中には一步踏み込んだ結論を期待したむきがあるかも知れない。しかし評者は、可能な限りの文獻資料を整理・提示した上でかような結論にあえて踏み留まり、新たに後代の西蔵学僧による注釈文獻という未開の分野に進んだ筆者の立場を支持するものである。

一、二の点について評者の所感を述べてみたい。一つはMSA

Bh の著者問題を論じる中で同論第Ⅺ章安慧釈に見出される Sahi rtsa lag が世親 Yasu-bandhu の西蔵語訳にあたる(一二頁)とする点である。註(四)(一四頁)で筆者が記すように「Sahi rtsa lag は必ずしも Yasubandhu の訳語であるわけではなく、可能性にすぎないように思われるのに「しかく」SAVBh における Sahi rtsa lag は Yasubandhu としてよむ」とする根拠が評者には不十分なように思われる。(なおこの問題に関しては松田和信氏により最近「この語は Yasu-bandhu の訳語である」ことが論じられている。同氏「Yasu-bandhu における三帰依の規定とその応用」『仏教学セミナー』第39号註⑤)を参照されたい。

次に評者が興味をひかれたのは第二章第六節に述べられている『莊嚴經論』第Ⅹ章末の撰頌への註である(二三頁)。

この『莊嚴經論』第一章乃至第九「菩提の章は『菩薩地』の」初品から菩提品にいたるまで順次に「説かれている如く」に理解すべきである。(評者試訳)

筆者が「むすび」の(四〇頁)で述べているように、明らかにMSABhの著者は(それが無著にせよ、世親にせよ)『莊嚴經論』の偈頌を『菩薩地』に基づいて理解すべきであると考えていたのである。

さらに、この撰頌を含めて、『菩薩地』・『莊嚴經論』には対応する撰頌が存し、各々の章分けにも深くかかわっている。この撰頌が持つ問題点を、後代の西蔵学僧の註釈などを参照してより深く追求して欲しかった。『菩薩地』の新古の層に関連す

る論点だけに惜しまれてならない。

四

さて、その後代の西蔵学僧による『莊嚴經論』の註釈を紹介するのが第四章である。これらの註釈文献は学会でも未開拓の分野で、筆者小谷氏がかつて西蔵学会で発表した折にも大きな注目をあびたものである。筆者によれば、一九世紀に西蔵で編纂された貴重本の目録に七種の『莊嚴經論』註釈書の題名が記され、そのうちの二書が入手可能という。さらにこれとは別に二種の註釈書が出版されているという。筆者はこれら四種の入手可能な註釈書のうち一五世紀に活躍したジャムヤン・ガロと一八〜一九世紀のパーマンの二人の註釈書を中心に紹介する(瑣細なことではあるが本文・註記ともにたとえはジャムヤン・ガロと Jam dhyans dgech blo というように両様の表記が不統一に記されている)。筆者はこれらの新資料を縦横に活用して『莊嚴經論』の章分け、同論書と『菩薩地』における基本構造と三種の学道、同論書第Ⅺ章に説かれる四十四作意の問題を論考する。『莊嚴經論』を研究する者にとってこれらの諸問題は避けて通ることのできないものであり、評者も含めてこれまでにいくつかの仮定的結論が提出されてきた。筆者はこれら「近代の仏教学者によって達成された研究成果」(六七頁)に対して上記の新資料をもとに精密な再検討を加えている。この再検討により最終的な結論が導びき出されるほど目下の問題は単純ではない。しかし筆者の努力により、課題とすべき点が明

白となり、何よりも「近代仏教学研究……を凌ぐ研究がなされていた」（同頁）西蔵の伝統教学を我われに具体的に提供してくれた功績は大である。

この伝統教学のなかで最も興味を抱いたのはジャムヤン・ガロの注釈である。筆者によればガロは、たとえば『莊嚴経論』第I章第二偈を注釈するにあたり(一)安慧・無性、(二)ローツァ・チェンポ、(三)智吉祥、(四)シャーンタパドラ、(五)サンジャナの各注釈を要約し、(六)諸註釈家に対するジャムヤン・ガロの批評と(七)彼自身の註釈を述べる(註(5)六八頁〜七九頁)。一註釈者の立場からとはいえ、『莊嚴経論』に説かれる思想がインド・西蔵の仏教学者の間に如何様に伝承され、どのような問題点をめぐって意見がたたかわされて来たのかが一目瞭然に示されているのである。『莊嚴経論』には章分けなど以外にも種々の論ずべき問題があり、安慧・無性の註釈でも不明な点が残されることは、この論書の研究に手を染めたことのある者ならば多々経験されたことであろう。その意味でも、ガロ自身も含めた七人の註釈者の解釈を他の問題についても教示してくれたらと願うのは評者一人ではないであろう。主要な問題に限っても、新たに稿を起して教示していただくことを筆者小谷氏に切望する次第である。

ところで筆者はこの章を上述の如く「西蔵の唯識学において……近代仏教学研究……を凌ぐ研究がなされていたことが確認される」と結んでいる。欲をいえば、これら貴重な西蔵文献を扱うに際して、近年確立されつつある西蔵学の一環とし

て論じるべきなのか、あるいはインド仏教理解のための補助手段と考えて事足りるのか、他に先がけてこれらの文献解明に着手された筆者のお考えをお聞きしたかったとの思いが残る。このことにより本章の成果が微塵にも揺がないことは云うまでもないが……。

五

小川一乗教授により「本書の最も中心的な研究成果」(二序によせて)と記されているように、筆者が最も力を注いだのが第五章であり、「唯識思想を瑜伽行修習の階梯の上に位置づけることよって、そこに明らかにされている大乘の教法観の上に唯識思想の担っている役割を解明しようとしている」(小川、同上)こと、すなわち「瑜伽行の修習過程における唯識説の役割を検討する」(一頁)ことが本章の、ひいては本書のテーマである。筆者は「瑜伽行における修習の中心が仏の教法を、対象として行なわれる唯識観の修習」(二頁、傍点は評者)であるところに瑜伽行学派の特色を見出そうとする。

瑜伽行学派の思想が識論(アラーヤ識論)、三性説、菩薩道(瑜伽行)の三面から成り立っていることはすでに指摘されているところである。筆者はその第三の瑜伽行をとりあげ、その対象に視点をすえて菩薩道のうち資糧道・加行道に重点を置いて論じている。従来この領域での研究がどちらかといえば初地入見道を中心になされてきており、手薄であったこの面での研究が本書を加えて充実したことは喜ばしいことである。

さて「仏の教法を対象」とする瑜伽行の修習を説くにあたり、この論述は必然的に仏説の定義や仏と所説の諸法との関連性から説き始めざるをえない（同章第一―三節）。筆者はこれらを論じるにあたり『莊嚴經論』（世親・安慧・無性や上述の西蔵学僧の諸註釈）は無論のこと、『般若経』、『解深密経』、『声聞地』、『菩薩地』（第一―四章はN. Dutta版、本章と第Ⅱ部は荻原本を用いている）、『中辺論』、『集論』、『撰大乘論』など多くの関連文献を引用し、厳密な考証をすすめている。

筆者は「教法を対象」とする修習を、まず『莊嚴經論』第Ⅺ章の「法という対象、*dharma-lambana*」を手がかりに、「聞慧による法なる対象」（一一二頁）へと論を進める。この「法なる対象」の論議は『莊嚴經論』第Ⅺ章五〇偈や『撰大乘論』第三章第七節（ラモット版）および『三十頌』第二七偈に類出する「現前に立てられた相（*puratah sthaptam nimittam*）」と「自然に存在する相（*sthitam svayam nimittam*）」へと集約される。前者は十二分教などを聴聞して不淨観などを修習する際の、観法の対象となるものなどをさす。我われのものの方、考え方を転換するための、いわば修行・訓練場における意図的な対象である。後者は日常経験世界におけるあらゆるものである。前者の修習により達成した観法を日常生活のものにいわば応用して、所取・能取の執着を離れるのである。さらに筆者は前者が加行道忍位で、後者が世第一法位にて修せられるとして、菩薩道の階梯に位置づけることに成功している（一一〇―一二二頁）。さらに本章は仏にまみえ教えを受ける法流

三昧の考察をもって締じられる。以上のように修習の対象を手がかりに、資糧道・加行道を中心に瑜伽行の具体的な観法を修行道の階梯に位置づけ「全てを唯識と観ずる止観」（一二二頁）を明らかにした筆者の功は高く評価されるべきであろう。

さて、資糧道・加行道を中心とした瑜伽行の内容が筆者小谷氏によって明らかにされた今、評者も含めこの学派の研究に携わる者が事とすべき課題の一つをとりあげて第Ⅰ部の紹介を終えたい。それはいわゆる「聞薰習」の問題である。本書でも論じられていたように、仏道を求めることは資糧道にて十二分教を聴聞することから始まる。それは「法界等流の法」であるとされる。しかし現実にはこの「法界等流の法」である十二分教を耳にしながらか、それを「法界等流の法」として聞く耳を持たぬ者が存するのも事実である。このことは、「十二分教」あるいは「法界等流の法」が初めからそれとして確かに存し、それを聴聞するというのではなく、あるおしえ（ことば）を聞いたときに、ある人の心の中ではそれが「法界等流の法」へと質的転換がなされるが、別な人にとってはそうではないと考えることができよう。換言すれば、ことば化された「法界等流の法」（世俗）が聴聞する人の心の中（心相続中）で「法界等流の法」そのもの（勝義）へと転換をとげ、そのことをもって「資糧道にて十二分教を聴聞して云々」ということが成立するのではなく、かろうか。この章が「教授・教誡」の名のもとに、五道のうち特に聴聞から始まる資糧道・加行道における実践も重視して説くのも（全五一偈中二七偈）、この「聞薰習」の問題が根底に

横たわっているからであろう。とすれば、これは修行階梯の問題にとどまらず、聞薰習すなわち識論及び三性説の論議へと展開せざるを得ないことになる。資糧道などを中心とした瑜伽行の階梯に関連しつつ、唯識觀の修習を考察した小谷氏の著書はアーラヤ識論、三性説をも射程に入れた「聞薰習」の解明を今後の課題として提出しているのである。

六

本書第Ⅱ部は『莊嚴經論』第XIV章の和訳(偈頌・世親釈・安慧釈)と同章の校定梵文テキストおよび安慧釈校定西蔵文テキストからなり、これらに先立って、智吉祥造『莊嚴經論繪義』に基づく野沢静証博士によるシノプシスと、ジャムヤン・ガロによるシノプシスが紹介されている。

さて、和訳のうちまず目にとまるのは冒頭の章題である。漢訳で「教授・教誡」とある「Avavāda-Anuśāsani」を筆者は一貫して「教誡・教授」と訳している。両語ともハイブリット・サンストラットであり(Monier-Williams, *Sanskrit-English Dictionary* は avavāda ㄱ Buddha. と ㄱ ㄱ "instruction, teaching" を出す)、Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary* は 'avavādānuśāsani' に "admonition and instruction" の訳語を与えているが、同時に 'anusāsani' の項に "hard to distinguish from avavāda" と特に記しているように、'avavāda' の意味は admonition であると断定したわけではなからうである (Edgerton は ちなみに、両語ともに 'instruction,

admonition' の訳語を与えている)。さらに *anuśās* には to teach, instruct とともに to rule, govern, punish, などの意味があるが avavāda にはこれらの意味が見出されないこと、『菩薩地』においても玄奘が avavāda を「教授」anusāsani を「教誡」と訳出していること(荻原本一四七頁、大正三〇卷五一三Cなど参照)などを考慮すれば、この複合語の訳は伝統的に考えられていたように「教授教誡」が妥当ではなからうか。筆者のように「教誡教授」とするならば、注記を必要とするであらう。

さて本文に移ろう。翻訳は大きな誤りもなく、漢訳を尊重しつつ読み易い訳になっており筆者の苦勞のあとが伝わるようである。註記も詳細に付せられていて、思想上の問題点と関連文献、あるいはテキスト校定上の問題点が細かに論じられている。ただ評者が意見を異にするのは、註釈文を本文(偈頌や世親釈)中にとり込む態度においてである。たとえば第一偈冒頭「阿僧祇劫にわたって出離せる〔菩薩は〕」(一四四頁)。誤りではないがいろいろな誤解を招く恐れがある。「第一の阿僧祇の劫より出でて」(字井訳)は論外としても、註釈を参照して「阿僧祇劫にわたって〔菩薩行を行じて初地へと〕出離した〔菩薩は〕」の方が読者には親切であろう。本文の後に提示されている釈文を読んで自分で補えばよいといわれるとそれまでなのだが……。

以下紙面の制約もあり、資糧道に限って世親釈を中心に気づいた点を若干記してみたい。

(1) 第四偈世親釈(一六四頁)、「経や応頌等の法において、『十

地〔経〕等の、経を初めとする〔十二分教の〕題名に、心を結びつけ……〕は「こなる経の名称は『十地〔経〕』である、〔応頌の名称は……〕云々というように、経や応頌など〔十二分教〕の法に心を結びつけ……」とすべきか。

(2)同(一四七頁)「決定心」中の「随観し伺察した所のその相をそれによって決定する……」は「先に」随観し伺察した〔経などの語や意味、文字の〕その相をこの「心」により決定するのである。

(3) 第八偈 a b 句(一五三頁)「諸法の題名が集約される」。この止道の説明は安慧の釈にあるように、第五偈の随観心と対応する(次の観道は同じく伺察心と対応する)から *ca* の意味を明確にして「題名〔と語と〕が……」と補うべきであろう。

(4) 第一〇偈の b 句(一五三頁)「さらには〔所縁をも〕捨する。〔それは即ち〕その所縁において平等を達することである。〔捨する〕は *upekṣeta* の訳であるが誤解される恐れがある。安慧釈のように a 句の語順 “*samapāpānam upekṣeta*” に従って「さらにその対象に〔沈むことも昂ぶることもない〕平等な〔心の〕あり方に到達する。〔すなわち対象に心が動じることのない〕無関心〔なあり方〕になるべきである。」などとした方が読み易いのではないか。

(5) 第一五偈 a 句(一五八頁)「微細な (*tranuka*)」。安慧釈にあるように「中ぐらいの、あるいは大きな適応性」と対比して「小さな適応性」の意味であり「わずかの、小さな」の意である。

(6) 第一九～二二偈(一六一頁)。この四偈に限らず頻出する “*suddhi* (-a), *visuddhi* (-a)” は “*purification*” という他動的ニュアンスなのだろうか、“*purity*” という自動詞的ニュアンスで『莊嚴經論』では用いられているのだろうか。この語自体には、おそらく両者の意が含まれており、個々の文脈にそって理解されるべきなのであろう。たとえば世親が、*“suddher hi sūdhyaśāyabhūmeh”* と訳する時に筆者は「浄化」の訳語を与えており前者の意に解しているようである。しかし浄勝意樂地は初地であり、評者には後者の意に思われるのだが如何なものであろうか。

(7) 第二二偈安慧釈(一六三頁)中、註④(二〇四頁)で筆者は “*hlo dan Idan pas* (*pa* は誤植) *nam pa yois su hdzin par byed de*” の *nam pa* を意味不明として削除して訳出している(西藏文テキスト二五〇頁。ちなみに訳中では *hdzin* であるが西藏文テキストでは *hdzin* と不統一)。しかし無性釈も同一文で *nam pa* があり (P. 301a, D. 268b) 削除には疑問が残る。これは直前に説かれた第四・第五の勝徳 (*anusānka*) を「二種の観想」に関連させて “*nam pa*” とし、具体的に法身圓滿と清浄の因 (*hetu, rgyu*) へと導びくのであるから削除しない方がよいのではないか。

以上評者の非力をもかえりみずまたひとり評者による本書読解の不当不備を恐れつつ筆者と意見を異にする一端を記させていただいた。いずれも些少のことで、これにより本書の学術的評価を損なうものではないことは言うまでもない。

最後に希望を一つ書かせて頂ければ、『莊嚴經論』の他の章についても、安慧釈、無性釈あるいは他の諸註釈に基づく解説研究がこのたびの小谷氏の御労作に触発されて後出されんことを強く望むものである。

(梵文テキストに限りて気づいた点を以下に記す。p. 222, 1. 18, avdharayati→avadharayati, 224-5 dhāne→dhyāne, 224

-26 vividhya→vividhya など。また連声を示す、ゝゝゝ記号が不統一に付加されており、第四一偈の世親釈に限りてコンマが打たれていたりするが、いずれも些細なことである。

なお、第四七〜五〇偈および世親釈について、現行の Levi 本は訂正を必要とするが、本書でなされた訂正梵文に関しては今は評を差し控えた。)。